

一茶忌や留守居の昼のカップ麺 山田真砂年

冬木立生きるに歩き続けをり

「稲」 3月号（青森抄）より

一句目。一茶六十五才の生涯に残した句は、なんと二万句以上。家庭運には恵まれなかったけれどその作風は庶民らしい親しみ易さがこもる。掲句の「昼のカップ麺」もなかなか庶民的。軽いペーソスを匂わせ、おかしみを誘う。一茶忌に相応しい。

二句目。高齢者のウォーキングの句。健康寿命を問われるようになった昨今、高齢者のウォーキング人口が増えた。道具もお金もいらぬ手近な運動だからだろう。要介護とならぬようせつせせつせと歩く高齢者。けれども加齢による肉体の衰えを止めようがないのは空しい。それでも最後の最後まで高齢者は一人で動きたい。人生の仕舞い方を考えさせられる一句。